

## 土岐善麿短歌賞

### 連作の部

#### 【優秀賞】

「自販機の影」

磯田 有季

平日の十時鏡の中にいて自傷のようにピアッシングする  
砂糖では癒し切れないくらいこと丸めて飲みこんだ星月夜  
サッカーに夢中な君を眺めるは日傘、黄揚羽、砂ぼこりの輪  
青い鳥追いかけるのをやめた日は横笛の中冷気が満たす  
微炭酸売り切れの文字自販機の横出来た影君を待ってた  
厳かね、以外の感想ないままで能楽堂を見つめる黒目  
ひまわりが下を向いてて無理矢理に上を向かせるまた項垂れる  
冷えきったミントの匂い纏う君雲の形を鳥居に例え  
焦茶色ローファー足に合わなくて履かないままの夏雨よ降れ  
ふわふわの物を持つてるだけのこと君に呪われ増す愛おしさ  
数列が続くように流れる雲よ十七歳の誕生日だね  
本屋にいるのは落ちつかないがときめきも含め好き寄りの嫌い  
改札を通る緊張思いつく休み明けの足秋めくピアス